

●二人で味わう古典和歌(77)

我が恋はまさかも愛し草枕多胡の入野の奥も愛しも

東歌

『万葉集』巻十四勸国歌(国土判明歌)「相聞」の一首。
巻十四は全巻「東歌」。前半には国名の明らかな勸国歌、

後半には国名の明らかな未勸国歌が収録されている。

この歌は、「上野の国」(現在の群馬県)相聞歌群の一首。

「わたしの愛しい人は、今の今もかわいくてしかたない
が、多胡の入野の奥、そう、これから先もずっとずっとか
わいくてしかたないだろうなあ」

恋人にめるめるの、古代の男の歌である。東歌に頻出す
るこのめろめる感には、ひどく胸打たれる。

旅にかかる枕詞「草枕」を、夕音をもつ地名「多胡」に
かけ、「草枕多胡の入野の」までが「奥」を導き出す序詞
となっている。

「まさか」(眼前・今)と「奥」(行く手・未来)が対比
されながら、「愛し」の脚韻をひびかせる構造のため、こ



れから旅立つ男の歌ではないかとの説が有力であるらしい。
つまり、旅立ちの直前(もしや別れの共寝の場面なのか)
と、その後の離れ離れの時間が、「まさか」と「奥」なの
だと。そしてその旅は、防人の任務に向かう旅ではなかつ
たかと。

なるほどそうであれば、枕詞「草枕」をやや強引に用い
たことも、また、「多胡」でなく「多胡の入野」と言ったこ
とも納得がゆく。山あいに入り込んだ奥深い野「入野」は、
これから行くべき旅の途上の光景と重なり、官人の公務出
張とは明らかに異なる、苦しい未知の旅程が想像される。

「まさかも愛しく奥も愛しも」というめろめるな愛の表
現の裏にはりつく、切実な不安や哀しみをこそ読むべきな
のかもしれない。

それにしても、「奥」という言葉の不思議な力を感じる。
ここでは、別れののちの時間の奥であり、旅行くだらう空
間の奥であり、なにより心の奥である。「奥」とは、時間
的にも空間的にも心理的にも遠く深くを意味する、まさに
奥深い言葉なのだ。

(小島ゆかり)